大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

枡富照子と朝鮮(一九九七年度第一回コロキウム)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 任, 展慧 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004985

枡富照子と朝鮮

任展慧（イムジョネ）

枡富照子は一八八八年三月、福岡県に生れる。福岡英和女学院英語専科卒業。福岡メソジスト教会にて受洗。一九〇七年四月、枡富安左衛門と結婚。この年、竹柏会に入会、佐々木信綱に師事した。

枡富安左衛門は一八八〇年五月、福岡県に生れる。早稲田大商科中退。一九〇六年より朝鮮全羅北道で農場を経営した。妻の影響を受けて一九一〇年、植村正久より受洗。枡富照子は結婚を機に朝鮮に渡った。だが病気勝ちのため、一年ほどして日本に戻り療養に専念。枡富安左衛門は朝鮮と日本とを往復した。一九三四年十一月、五十四歳で没。

枡富照子は夫の家督・農場経営を継承。これ以後、一年のうち三ヶ月ほどを朝鮮で過すことになった。夫の没後一周年記念に際し、枡富照子は『枡富安左衛門追想録』（一九三五年八月刊・非売品）をだした。編輯者は川添万壽得、発行者は枡富照子。四六判、千二十五ページ、厚さは五センチ、表紙は黒の木綿という一本である。故人の年譜、遺稿、講話、日記、書簡等の他に、一三四名の追悼文がおさめられている。一九四四年七月、東京に戻り、疎開した山形県で日本の敗戦を迎えた。一九四八年、新歌人会、女人短歌会に入会。また、この年より二十年間、富士見高等学校で茶道を教えた。一九四九年より六八年まで中野刑務所篤志面接委員として、中野刑務所・婦人補導院で短歌を指導した。一九七二年十二月、八十四歳で没。

枡富照子と朝鮮とのかかわりは三つの時期に大別することができる。第一は、一九〇七年から三四年にかけての農場経営者の妻としての時期である。第二は、一九三四年から四五年にかけての農場経営者の時期である。そして第三は、一九四五年八月十五日以降の植民地から戻った日本人としての時期である。枡富照子には自分で編んだ六つの歌集――『月鳳里の歌』『稔』『笛』『樫の木のもと』『凝禱』『郷愁』――がある。朝鮮における体験は、枡富照子の作歌活動にどのような影響を与えたのであろうか。キリスト教歌人枡富照子と朝鮮とのかかわりをみてゆこうと思う。

I

はろばろし海路の旅を今朝終へて夫(つま)が仕事場の土をふみけり

第一歌集『月鳳里の歌』(一九四一年七月、長崎書店刊)の冒頭の一首。一九〇八年の作である。「朝鮮群山につきて」という詞書がある。この集には、一九〇八年から四〇年までの短歌五百八十首と文章九篇とがおさめられている。

佐々木信綱は枡富照子にはじめて会ったとき、朝鮮のこととキリスト教歌人としての信仰とをよく詠むように、と言ったという。この言葉は、枡富照子の短歌を支える二本の柱となった。一九六三年の作である「佐々木信綱先生の年ほぎ」九首のなかで、当時の様子が、つぎのようにうたわれている。

心こめ朝鮮のことをよく詠めと教へられつる思ひ出あらた

入門の時の御言葉忘れ得ずキリスト教歌人はまことに稀なればと

佐々木信綱の教えを心に刻んでいた枡富照子が朝鮮を詠んだ最初のうたは、掲出したものである。枡富照子にとって、朝鮮の地は夫の「仕事場」でしかなかったのである。外国の土地という意識はみられない。その「仕事場」のことにふれておきたい。

枡富安左衛門は、一九〇四年一月一日の「日記片々」（『枡富安左衛門追想録』所収）のなかで、一年の計にふれて「韓國農業に付きて之れが經營をなして國利民福を謀る考へなり」と記している。あくる月に「日露戦争」への出征を命じられて、一九〇五年十二月に帰国した。朝鮮の土地を実際に目にする機会を得て、全羅北道に的をしぼった。翌年には早速、土地の視察・買収を行っている。一九〇六年六月二十五日の「日記片々」には「買収水田は先づ四千斗落となす」と記されている。「四千斗落」は「八十万坪」に当る。農場用地に定めたのは「全羅北道金堤郡附近」であった。一九一二年九月に開通した湖南線の金堤駅周辺である。屈指の穀倉地帯である。枡富照子は、「月鳳里の戰から平和へ」（『笛』所収）のなかで、この土地は「全北で誇る美田」であり「地味到つて肥沃。始の頃は肥料を與へずして草地に稲の種をばら播きにしても、よく稔つた。」と書いている。また、日本人の土地買収に対する村人の様子を「私の朝鮮靴」（『月鳳里の歌』所収）のなかで「日韓合併前、半島人はまだ日本人を理解しないので、銃先を向けてよせて來た。」とも伝えている。

枡富安左衛門が農場経営を始めたのは一九〇六年七月であった。二十六歳のときである。金堤に本拠をおき、一九〇九年には月鳳里にも住居、農場、事務所、社宅、倉庫等を建設した。住居の敷地は「四万坪」であったという。枡富安左衛門は引き続き、農場拡大につとめている。一九一一年一月二十七日の「日記片々」には「經營方針照子に相談せしに余と意見を同うし積極的の方針を賛成し呉れたり。」と書かれて

いる。同年六月二十四日付の照子宛の手紙（『枡富安左衛門追想録』所収）のなかで「朝鮮の地は遠き將來は亞米利加のカリホルニヤと化して追々と生産増加」するにちがいないと書き、「幸なるかな、この朝鮮の地。」と評価している。矢張り同年十月十日付の照子宛の手紙のなかでは「本年の成績は極めて美事のものと思ふ――略――萬歳。御身もその地より毎日應援して呉れし故なかなか心強い。」と報告されている。「毎日」という言葉は事実だったのである。枡富夫妻は、ほぼ毎日のように手紙のやりとりをしていた。枡富安左衛門は照子宛に、朝に夕に二度も手紙を出したことすらある。枡富安左衛門はそれらの手紙のなかで、土地買収の交渉状況とその結果、経営状態、農作業の進捗状況、人事問題等をこまかく書き送っている。大切な相談相手だったのである。一九一二年五月十四日付の照子宛の手紙は「夫の事業に燃ゆるが如き同情と趣味を持てる照子殿」と書き出されており、農場で働く日本人たちに「月に一度位」は手紙を出すように、と勧めている。

「御身よりするものは場員には又一種の大いなる調和となる――略――さうすれば自然と御身も居ながら事業に従事すると同様と思ふ。」

枡富照子は、このようなかたちで農場経営に参与していたのである。このことは同時に、夫の没後、農場の継承に齟齬をきたすことのなかった一因でもあった。

枡富安左衛門は、一九一一年十二月に全羅北道高敞郡吾山里で果樹園の経営（一九二七年に手放した）にも着手している。面積は「三万餘坪」で、働いていた人びとの数は「五、六百人」であったという。

枡富照子は、吾山果樹園をはじめて訪ねたときの様子を、「吾山行」（『月鳳里の歌』所収）のなかで、つぎのように記している。

「大正六年九月二十七日、俄の思ひ立ちで、夫の仕事場なる朝鮮吾山の果樹園に行くこととなつた。

――略――金堤驛に着いたのは午前十時であつた。眞子夫人はなつかしさうに出迎へられた。私と眞子夫人は人力車、夫は、しばし別れて居た愛馬櫻山（あうざん）に跨つて、農場に向ふのであつた。人家は少い。黄金色の田は私どもを祝福して居る様に見えて、感謝と、嬉しさに充たされた。これが私の子供なのだ。我がいとし子なのである。村の子供や、大人達は走り出て挨拶をする。――略――

農場までの道が泥濘脛を没すと云ふほどで、人力車を引いて居る農場の男の脛を埋めた。男は白い朝鮮服の裾を巻き上げて、眞子夫人の車夫と二人で私の乘つて居る車をかつぎ上げた。私は下りようと云つたが、言葉が通じない。其のままかつがれて一町も來た。――略――私は辛うじて車のまま泥濘を脱し得た。しばらく歩いて、柳櫻をこきまぜた林を過ぎ農場の門に入つた。西側の柳は水に枝をたれて、綠が鮮かである。十二年前から初めた夫の事業地に來た悦は大きかつた。ここに一泊した。ここは米作ばかりである。吾山果樹園はそこから十三里、夫の櫻山について、朝鮮駕籠で低山をこえ川を渡り、眞紅の實のたわわになつて居る林檎園に來た。空が清い、高い。朝の鐘に人々は集められて業が初まる。夕べの鐘に終る。その日の賃金を貰はんと立ち竝ぶ人の群、勞働の悦を顔に輝して居る人らにお禮をしたい気持である。空が見えないほど枝を張つて實つて居る林檎の下で、夕べの感謝をする。」（傍点・引用者）

ここには、農場主の奥様としての枡富照子の姿と心持ちとがよく示されている。とりわけ、傍点のくだりには、独りよがりな断定と強い自己満足があふれている。農場主の視点といえよう。

農場の面積は、一九〇六年に「四千斗落」（八十万坪）を目標としていたことは前述した通りである。一九二八年には「二万町歩」（六千万坪）、一九四一年以降（一九四五年八月十五日まで）は「千町歩」（三百万坪）となっている。朝鮮人の小作数は一九二三年に「九〇〇戸」であったが、一九二八年には整理されて「五四五戸」になっている。

枡富安左衛門は、農場経営の傍ら教会と学校を建設している。「學校と傅道。第一に學校に着手が順序らしい其次に傅道がいいと思ふ」（一九一二年七月十一日「日記片々」）として、一九一二年十一月二十五日に設立したのが私立興徳学堂である。十七名の生徒から発足した。私立興徳学堂が母体となり、私立吾山普通学校を経て、一九二二年六月には私立高敞高等普通学校と改称。これを機に校長となった。学校の件で枡富安左衛門は、二度にわたって表彰されている。枡富照子が、その度に詠んだうたは、つぎの通りである。

一九二八年二月十一日、朝鮮総督府より「教育功勞者」として表彰されたときの一首。「半島人教育の功にとて總督府より時計を賜はりぬ」と詞書に記している。

聊かのことと思へどめでまして賜(た)びにし時計よろこびを刻む

一九二八年十一月二十二日、天皇より「教育事業ニ盡力セル廉」で表彰されたときの二首。「高敞高等普通學校を創めしによりて銀盃を賜はりし時」と詞書に記している。

白金(しろがね)の天つさかずき賜はりし光榮(はえ)にひたすら報いまつらむ

高麗の野の小草にまでも御恵のかがやく露のかかるかしこさ

一九三四年十一月、枡富安左衛門死去に際してうたった「夫の枕辺にて」十首がある。そのうち、事業継承の決意を示した二首を記しておく。

よみがへり生きます夫(つま)が魂を御(み)ちからとして御業まもらむ

のこしまし業ひたすらになしとげむ御力たべと祈りつづくる

第一歌集は、枡富安左衛門没後七周年を記念して刊行されたという。「ここに七めぐりを記念し、「月鳳(げつぽう)里(り)の歌」一巻を、亡き夫の霊にささぐ」と「跋」に書かれている。この集のうち、はじめて朝鮮の土をふ

んだ一九〇八年から夫の死の一九三四年までのうたには、農場主の奥様・一旅人の視点から朝鮮の風俗と自然とをうたっているものが多い。この時期の特色を示しているものに、つぎのような諸作がある。

高麗平野はしりつづけてはつはなは秋風嶺のポプラをそそる（「朝鮮秋風嶺驛を過ぎて」）
白たへのきぬあらためて小作人らが出で迎へをり楊たるる門邊
うらぐはし全羅平野は目路の限みどりの波のゆたにゆれをり（以上「月鳳里につきて」）
わら屋根に干せる唐がらし花あらぬ平野の花と今さかりなり
胸高にくれなゐの紐靡かせゆく頭上のかめに心もとめで（以上「折にふれて」）
朝霧に入りまじりつつオンドロの煙はひくく地をただよふも（「折々に」）
南大門五百年を立ちてこの國の榮えおとろへつばらに見しか（「京城」）
萬二千金剛のみねは海に浮くうちつくる波のかたちをきざみ（「海金剛」）

枡富照子は夫亡きあとに迎えた最初の収穫の様子を、「月鳳里につきて」二十九首のうちで、つぎのようにうたっている。

決算報告亡き夫の前にささげつつ一年をつぶさに心に述ぶる
山と積める倉庫の俵仰ぎつつ世界經濟の動きおもひ居り
ひろ庭は小作人にうもれ種籾をはかる升目は山にもられ居り
背を丸う重げにちげを負へる老翁長き烟管はわきばさみ居り

ここでの情景は「私の朝鮮靴」（『月鳳里の歌』所収）のなかにおいても、「収穫の時、小作人が籾を運んで來るチゲは、私のまはりに十重二十重と坐りました。私はそれを終日ながめるのが秋のうらら日の日課の一つでもあり、樂しみの一つでもありました。」と書かれている。田植え時の雨にも、無関心ではい

られなかったのである。「折々に」十五首のうちでは、つぎのようにうたわれている。

雲おもみ南のかぜをよろこびて雨かと待てど風かはり來る

田の畔の草枯れかかり土の色しらけたり今日も雨待ちつくす

一九三七年五月一日の日記（『母　枡富照子』所収、石井武子編集・発行、一九七七年十一月、自家出版）には、農場経営者としての枡富照子の感想と心構えが記されている。

「十二年度の予算の打ち合わせをなす。年間相当の収益をあげることが出来て感謝なり。河川改修、耕地整理によりて相当の純益を見る様になるならん。こうなれば手放せし果樹園も爰の百町の田も惜しまれども、今日の基礎の確立と思えば感謝である。一歩より歩みはじめんとした忍苦十年の艱難此に見るべし。本年より農場として十分の一の収入を神に献げる決心をせり。先ず、農村伝道を小作人に対して始めん。――略――感謝のうちにこの計画遂行の打ち合わせをなす。必ず主は備え導き給うを信ず。」

夫没後も農場経営に変化はなく、将来も高い収穫が保證されていることに安堵したのではないだろうか。枡富照子の新たな自信すらうかがうことができる。

一九三七年七月、中日戦争の全面化とともに、枡富照子のうたは大きく変ってゆく。戦争を詠んだうたがふえている。出征してゆく青年たちの武勇を祈願し、国の戦況報道に強い関心を示している。戦勝報道に喜びをあらわにしている作が多い。

霜空に歡呼のこゑす起きいでて出で征く人のうへをいのるも（「支那事變おこりぬ」）

「完全攻略」臨時ニュースを聞き居つつ胸をあふるる萬歳と涙と（「武漢三鎮の落ちし日」）

朝鮮においても植民地統治政策が強化されている。この年の十月に「皇國臣民の誓詞」が強要、翌年には「朝鮮陸軍志願兵令」が公布・施行された。これらの動きは、枡富照子のうたにも反映している。

「折々に」十五首のうちには、つぎのようなうたがある。

志願兵朴、金たちの出で征(ゆ)くを日鮮のひと入りまじりおくる

邑民の歡呼のこゑにおくらるる志願兵のかほおごそかに見ゆ

枡富照子の作品のなかで目立っていることのひとつは、天皇崇拝である。『月鳳里の歌』の第三首めの作は、「明治天皇の崩御をいたみ奉りて」と詞書されている。一九一〇年の作である。

畏けど吾等くに民の御親とし仰ぎまつりしを神さりましぬ

新年には農場に「日の丸」を掲げている。皇太子誕生を祝い、「紀元二千六百年」式典を祝っている。その都度、つぎのようなうたをうたっている。

ちりめんの日の御旗なびく元旦の全羅南北のあさかぜはらみ（「農場の國旗掲揚臺」一九二六年作）

み民こぞり待ちまつりたる日の大皇子あれ出でましつ此のよき朝(あした)（「慶祝の歌」一九三四年作）

日いづる國大きみいつの御(み)ひかりはこの秋晴の空にかがよふ（「紀元二千六百年式典の日」一九四〇年作）

枡富照子が作った「月鳳里奉月簡易學校」の校歌を紹介しておきたい。石井武子は「母への追想」（『母枡富照子』所収）のなかで、「村の小学校では、母の作詞、大木正夫作曲の校歌を作り、私がオルガンをひいて教えたりもした。」と書いている。

月鳳里奉月簡易學校校歌

一、わが奉月の學舎(まなびや)に
　吾等は學ぶ日々(ひびひび)日々に
　皇國臣民(すめらみたみ)の忠節を

吾等の胸に藏(をさ)めつつ
二、神の教に導かれ
至誠の道を一すぢに
進み進みてたゆみなく
心の畑(はた)を耕さむ
三、仰げば高し半島の
空にかがやく日の光
玉なす汗の地にしみて
御(み)國の富とよく實(みの)れ

枡富照子自身は、この校歌をつくったときの心持ちを「赤誠をこめて唱(うた)へばわが衷(うち)にみなぎるものをまざまざと覺ゆ」とうたっている。この校歌には、枡富照子の内面を支えた三要素――日本帝国主義の植民地政策への賛同、キリスト教信仰、天皇崇拝――が、矛盾することなく一体化している。三番の「半島」という言葉は軽くみすごすことはできない。「半島」は、植民地時代に日本人が朝鮮を指して言った蔑称である。「半島人」「半島の人」も朝鮮人に対する侮蔑の用語である。その「半島」という言葉を、他ならぬ朝鮮人生徒たちに歌わせているのである。枡富照子の無神経には憤りを感じずにはいられない。枡富照子のうたのなかで、これらの言葉を詠みこんだうたが目につく。

II

水みてる千町苗田の畔に立ち今年のみのり神にいのるも

第二歌集『稔』（一九四三年十二月刊、心の花叢書・非売品）の見返しに掲げられている一首である。この集には、一九四一年から四三年までの短歌四百十八首と民謡四篇と文章十四篇とがおさめられている。「千町」とは、このときの農場の面積「千町歩」（三百万坪）のことを指している。この集では、枡富照子が「聖戦」をうたい、植民地政策に協力してゆく姿がくっきりと示されている。

歌集名について、佐々木信綱は「序文」のなかで「今年は月鳳里の田の面のみのりが豊かであつたとのこと、決戦下の御爲にまことに喜ばしいきはみであるが、さういふ記念をもこめて、この集を「みのり」と名づけられたとのことである。」と書いている。

一九四一年作の「使命」三首、「畔」三首、「月鳳里にかへりて」七首には、戦争に協力する農場の様子と田植えに対する意気込みとが、それぞれつぎのようにうたわれている。

みいくさに農場の鐘もささげたりあした七時の祈に聞きし鐘（「使命」）

から國の牡牛すらだに皇國（すめくに）にささげつ首の小鈴の束を（「畔」）

月鳳里わが此の村のをみな等の刈干す籾は大君のため（「月鳳里にかへりて」）

この頃につくられた「田植唄」（全五連）の二連は「うゑろうゑろせい出してうゑろ／國のたからの増

産戦士」、三連は「揃つて植ゑたら苗の列も揃つた／われらお米で勝ちぬかう」となっている。

この集には、枡富照子の旅行記「滿鮮の旅」がおさめられている。一九四二年十月一日より二十五日にかけて、李王妃の命により朝鮮の女学校と「滿洲」の視察を行った。その際の日記である。旅行詠百三十首も含まれている。李王妃は一九四〇年、東京渋谷に女子留学生のために鴻嬉寮を建てた。主任は女子学習院幼稚園主務の宇佐美ケイ。枡富照子は顧問であった。旅行には、この二人の他に石井武子も同行した。そのとき、宇佐美ケイは五十九歳、枡富照子は五十四歳である。李王職と総督府が日程を組んだ。九日間のソウル滞在中の訪問先は、朝鮮神宮、昌徳宮、総督府、女学校四校、始政会館の順であった。そのうち、淑明女学校を訪れたときの様子は、つぎのように書かれている。

「至れば已に講堂には生徒一同朝拝の用意なりて、先生、生徒正座の中を迎へらる。東方遙拝、黙禱、皇國臣民の誓詞、さて吾らの紹介などありて、鴻嬉寮主任宇佐美女史一場の挨拶あり。校庭にいでて、全生徒の分列式を參觀、寫眞の撮影あり。

踏みしむる半島の大地皇國(すめぐに)のをとめの精神(こゝろ)とつとつとひゞく」

一行は、訪問先の女学校で必ず、抹茶の接待をうけている。枡富照子は、「かゝる事によりて日本精神を教へんとのこゝろなり」とよろこんでいる。

「茶室に招ぜられ、生徒の御手前、しかも半島の女子のふくささばき、殊の外さわやかなり。羊羹にそへし抹茶の香、またく皇國臣民の味なり。」

女学校視察の目的は、朝鮮の女子学生たちの「皇國臣民」化と戦時体制への順応ぶりとを確認することだったのである。したがって、枡富照子は、モンペ姿の朝鮮の女子学生たちの体操に「時代の女性としてうれしく思ふ」と感じたのである。

國防色一いろのモンペに歩みならす足音の皇國のをとめのひゞき

十月七日のくだりに、「李完用公の孫に當らるゝ丙吉氏の御宅の晩餐にあづかる。」と書かれている。そのときの一首に、つぎの作がある。

こまやかに心こめらるゝ神仙爐ならべつゝ思ふ大祖君のこと

「大祖君」とは李完用のことである。一九〇五年、日本は「乙巳条約」を強制し朝鮮の外交権を剥奪。朝鮮人たちは、署名した五人の大臣を「乙巳五賊」と批難した。このとき、李完用は学部大臣として署名、高宗に譲位するようにさせた。一九一〇年には、総理大臣として政府の全権委員になり「韓日併合」条約に署名した。李完用が、売国奴と糾弾されているゆえんである。

二日後の十月九日には、「韓日併合」条約が調印された場所・始政会館を訪れている。

「日韓合併の記念の建物なり。明治四十年一月、大正天皇、皇太子にましまし、折、行啓遊ばされ、李王殿下を東京にお迎え申すやうとの、その評議をせられし室がこの室にて、赤い絨壇や皮の椅子、中央の朱ラシヤの大きなる卓子かけなど、今もそのまゝに置かれあり。調印に用ゐられし硯は、竹の模様の金蒔繪にて、青きインキつぼもならべあり。」

ここで詠んだうた二首が添えられている。

高麗の皇子李王世嗣につきまゐらせし博文公の生きますがに覺ゆ

合併の調印なりて刻したる朱き肉色の鮮かなりや

伊藤博文は、十歳の皇太子・李　垠を、人質として、日本に強制的に連れていったのである。李　垠の異母妹の皇女・李徳恵も、十三歳のときに母親のもとから離され、人質として、日本に連れていかれて、精神を病んだ。一九〇九年、安重根は伊藤博文を暗殺した。安重根義士記念館が現在、ソウルにある。

いま掲出した二首のすぐあとには、「合併といへば、私には感慨無量なり。それは、夫が事業に精神的に一新紀元をなせし時なれば。」と付け加えられている。「韓日併合」を機に受洗を決意したことを指す。朝鮮民族の怨嗟は眼中に無かったのである。枡富照子の歴史認識がよく示されているくだりといえよう。

キリスト教者としての枡富照子の活動にふれておきたい。農場経営と共に、「夫の信仰をつぎ、教会と聖国(みくに)とに奉仕」(一九三四年十一月六日「日記」)することを、自らの事業のひとつと定めている。そのあらわれとして、村の教会で説教を行っている。「「我らの今」と題して語る。張さんの通訳なり。信仰は実に不思議なものなり、相通ずるものあり、実に愉快なりき。純な村の人々なり。」と、一九三七年四月二十五日の「日記」に記されている。

枡富照子は、朝鮮の農民たちに、どのようなキリスト教者をのぞんでいたのであろうか。一九三八年五月二十五日の「日記」に、つぎのようなくだりがある。

「午後尹牧師の訪問をうく。相変わらずいつもの尹さんの持論が出た。「私ははじめ朝鮮の現状を悲しく思ったが、信仰によって立たされ、神の前に真に悔改めた新しい人であれば人種は問題でない。又それと同時に、朝鮮人が真に神の前に悔改める事が、朝鮮人として新しく立つ事だと思う様になりました。」尹さん、信仰によって立たされ、神の前に悔改めた新しい人になった吾ら、手をとり共に歩まんと語り合い、心通い合う一日なりし。」

「尹牧師」は、枡富安左衛門が渡瀬常吉牧師(朝鮮総督府の庇護のもとに活動していた。)の推薦により、神戸神学校に学ばせた奨学生の一人である。当時、枡富農場内の吾山教会に属する牧師であった。「尹牧師」は、キリスト教者としての平等が、抑圧民族と被抑圧民族間の不平等を解消する、という幻想を抱いていたのである。また、枡富照子は、朝鮮人の幸福とはキリスト教者になることで新しい日本人に

生れ変わるところにある、と考えていたのである。朝鮮人の日本人化をめざす点において、両者は意気投合したのである。まさに日本帝国主義の植民地政策――「内鮮一体」「民族同化」と軌を一にすることであった。

一九四三年の作「或る日」三首のうちに、つぎのようなうたがある。

創氏改名の男をみなの中にまじり讃美歌を我もたからに唱ふ

ひたぶるに皇國の爲につくせかしと神眞理を邑人につぐ

朝鮮人の「皇國臣民」化を願う枡富照子の心持ちは、一九四三年の作「すさび」二首においても、あきらかにされている。「崔承喜を見て、二首」という詞書がある。

邑に立つ天下大將軍のあしどりのいかめしくはたうつくしき眉

からの野のをみなへしの花敷しまのやまとの花と咲き匂ひたれ

一九四四年六月十八日の「日記」には、田植え時の様子が、つぎのように記されている。

「日曜なれども、田植の時期にて人手不足の折から、当局より礼拝中止の命あり、ただ裏庭にいでて聖書をよみ、武子と祈る。

田植えに金堤の女学校の奉仕をうく。感謝なり。面長来りて種々常の厚意を謝す。よき面長にて農場は仕合わせなり。面より三千の田植えの人配置せりと、人手不足はかくして補われ、短期間に着々進捗す。水路の水豊かに流る。耕地整理されし平らなる田、次第に植えられゆきて青稲田に風の渡る。」

これは、枡富照子が、月鳳里農場の経営者として立ち会った最後の田植えであった。七月十七日には日本に戻っている。例年通りの慣習に従ったのである。一九四五年七月、山形県に疎開。その地で「八月十五日」を迎えた。八月末には山梨県の山中湖畔の別荘に戻っている。一九四六年以降は東京に住んだ。

目さむればからの稲田の垂穂のいろゆたに見えきて心狂ほし

Ⅲ

第三歌集『笛』（一九五〇年十月、女人短歌会発行、女人短歌叢書Ⅸ）所収、「秋」四首のうち、第三首めの作。一九五〇年の作である。この集には、一九四五年から一九五〇年までの短歌三百八十首と詩一篇と文章六篇とがおさめられている。枡富照子の六十歳代はじめのものである。上篇と下篇とに分れている。朝鮮をテーマにした一連の作品は、上篇の「韓　國」、下篇の「全北平野」という見出しのもとにまとめられている。いずれも、上篇と下篇との冒頭におかれている。題名と作品数は、つぎの通りである。

上篇・「韓　國」（「韓國を思ふ」十九首、「月鳳里の虹」五首、「春」七首、「秋」四首、「夏」二首、「高麗茶盌」四首。）

下篇・「全北平野」（「月鳳里の農場」二十一首、「戸妍歌集」一首、「金堤の砂金」四首、「干拓田」二首、「邑の新年」三十八首、「邑の洪水」七首、「育みつる朝鮮の學生」一首、「月鳳里の教會にて」四首、「京城　李完用邸にて」二首、「わかれ」九首。）

朝鮮をうたった作品数は百七十一首（「韓　國」四十一首、「全北平野」八十九首、その他四十一首）である。そのなかには、再出作七十八首（『月鳳里の歌』より五十一首、『稔』より二十七首）が含まれている。

『笛』は、枡富照子が一九四五年八月十五日以後に刊行した最初の歌集である。朝鮮のうたを、枡富照子は繰り返し繰り返しうたっている。朝鮮に対する関心の強さを、あらためてうかがうことができる。『笛』の刊行日付は、朝鮮戦争が始まった四ヶ月後のことである。上篇・「韓　國」冒頭の「韓國を思ふ」には、朝鮮戦争の報道に接したときの様子が、つぎのようにうたわれている。

金堤は米、米は金堤といはれたるわが金堤に入りし北鮮軍
韓人に幸ゆたかなれとゆきめぐりし足跡いまだ消えずてあらむを
會ふ人らたちまちわれに朝鮮のことをいふなり朝鮮のことを

一九五〇年の時点においても、枡富照子にとって、金堤は、「わが金堤」なのであった。同じく、農場への思い入れを詠んだうたに、つぎのような諸作がある。

金堤のそこに住まへる小作らをわれはみな知るまもらせ給へ（「祈」）
教育と生活とあたへ韓國の若人のためにわれら生き來し（「高麗茶盌」）
空青み収穫場（とりいれば）とりまくちげの輪の十重の二十重の目にうかびくる
天高くますみに澄めるからの畓（た）の垂穂ほめつつ夫とゆきつる
から國に夫の遺し業もるがたまきはるわれの命なりしを（以上「秋」）

再出作のうちには、「白たへのきぬあらためて小作人（こさく）らが……」「創氏改名の男をみなの中に……」の二首もあり、驚かずにはいられなかった。金剛山で詠んだうたも、「滿鮮の旅」（傍点・引用者）として再出している。農場主として過ごした日々をうたったものが多い。さすがに、戦争賛美のうたは再出していない。他に、つぎのような再出作がある。

「枡富農場の銀坊主（ぎんぼうず）」てふ立て札のかげ苗代の床にひたれり

滿江林檎のみのりゆたけしぬかづきて大天地の秋に禮する（以上『月鳳里のうた』）
整理せる耕地の青田はろばろし見るにたのしもあさ風のなかに
裳高うからげて植うる一列のまへに苗取がたばはふりゆく（以上『稔』）

一九四五年以前の朝鮮を題にしたうたのうち、この集に、はじめておさめられたものもある。つぎのような作である。

國のさかひ人のさかひをうち越えて聖靈の結ぶきづな尊し（「月鳳里の教會にて」）
舍音らが青磁の瓶などもて來つつ一年を謝す年のくれがた
（――舍音は小作人らの頭――）
月鳳里照りかへす日に小作らのとりゐるくさは何番草か（以上「邑の新年」）
うつくしき夫人にこやかにかたりつづく紫の裳翡翠のかんざし
あめいろに床光りをりオンドロのぬくみここちよし廣間秋の夜（以上「京城　李完用邸にて」）

枡富照子は、この集におさめられている「月鳳里の戰から平和へ」のなかで、月鳳里農場の歴史にふれたあと、つぎのように書いている。

「夫の書齋も、オンドロも、夫が最後に往つて讀んだ本、そのままがそつくり殘してある。毎夕の三坪の橋の上での祈のあとも見え、毎朝靜かにあるいた邸内の松林の散歩道にも、跡が殘つて居る。私はそのあとを見、踏むために殘された餘命である。」

月鳳里農場の土を再び「踏む」という思いは、一九四五年八月十五日以後の枡富照子の生活を支える目的となったのである。

これ以後、つぎの二つの歌集が刊行されている。

第四歌集『樫の木のもと』（一九五八年九月、白玉書房刊）。枡富照子は七十歳である。この集には、一九五〇年から五八年までの短歌四百五十三首がおさめられている。

第五歌集『凝禱』（一九六〇年十月、白玉書房刊）。この集には、一九五八年から六〇年までの短歌四百五十三首がおさめられている。この二つの歌集では、朝鮮を詠んだうたは、ややすくなくなっている。しかし、朝鮮への思いそのものが薄らいでいるわけではない。日本の自然や日常の生活に即して、月鳳里農場への執着や追想が、さまざまにうたわれている。朝鮮をテーマにした一連の作品の題名と作品数は、つぎの通りである。

『樫の木のもと』（「呟やかぬ月鳳里」二十二首、「交流」三十七首、「孫戸妍の歌集「無窮花」に」十二首、「沈思」十七首、「春」三十首、「秋」二十一首、「武藏野」三十三首。）

それらのうち、つぎのような諸作がある。

窓に透く柿の若葉や朝鮮にうつし植ゑつるを呟かぬなり

見し夢は意義なしとせず綵衣の朝鮮服に包まれし生活

四十年をかたく根づきし農場の吉野ざくらいまさかりなるべし（以上「呟やかぬ月鳳里」）

土のままの筍いづる店先の追憶は遠く南鮮にいたる

暗に照りて數かぎりなき誘蛾燈のはなやかなりしよ全北平野（以上「交流」）

高麗の野に心はいたりわが庭の白き躑躅は郷愁を誘ふ（「春」）

夕立の餘滴の音か朝鮮の畑にひそみし水鶏のこゑか（「秋」）

いまそこにくぐみある聲に蛙なけば朝鮮の或日の錯覺おぼゆ（「武藏野」）

『凝禱』（「幻」三十三首、「あげ汐」三十四首、「歌聲は消えず」十二首、「異國のいのり」十首。）

それらのうち、つぎのような諸作がある。

老いほけし樹齢と思ふよりあへる農場の櫻吾を待つらむか

農場の鐘のわななきに櫻花なほも亂れむかく隔てられ

或時はうつし身となりてともなへる夫の錯覺月鳳里の道（以上「幻」）

水戸に見る櫻並木よ月鳳里を今は昔の夢とはせざり（「あげ汐」）

山近き湘南の田は黄ばみたりかつての朝鮮の千町田うかぶ（「異國のいのり」）

「幻」三十三首のうちには、軽く見すごすことのできないうたがある。つぎの一首である。

悲しみは花のさかりに極まれり國を仕事を裂きさかれ來て

このうたには、枡富照子の朝鮮認識がきわめて明確に示されていて興味ぶかい。一九四五年八月十五日の意味が分っていないのである。朝鮮の独立を認めていない。一九四五年以後においても、枡富照子の意識のなかでは、朝鮮は自分の「國」なのであり、月鳳里農場の経営は自分の「仕事」なのであった。結句の「裂きさかれ」という表現には、枡富照子の怒りと口惜しさがにじみでている。まさに時代錯誤の極みである。同じことは、「月鳳里の戰から平和へ」においても指摘することができる。一九二六年、高敞高等普通学校の新校舎落成式に朝鮮総督が出席したことにふれて「時の齋藤総督もおいで下さつて、野にあつて信仰をもととした教育と事業が、日韓緊密の役だと悦んで頂いたものである。」と、誇らしげに書いている。

また、一九六一年九月九日付『キリスト新聞』のコラム「葦の言葉」では、つぎのように書いている。

「明治三十九年、全羅北道に農場を経営した。其後日韓合併が成ったので、夫は野にあって、その実をあげるのは、自分らの務めであると確信したのである。自身の入信以来、基督教に依る日韓の一致を希う

あまり、小学校を、また中学校を設立して、青少年の教育に力を尽した。」

この一文を掲載した『キリスト新聞』社の態度に、大きな衝撃を受けずにはいられなかった。朝鮮の植民地支配に荷担した日本キリスト教者の責任問題を、どのように考えているのであろうか。朝鮮民族支配に荷担した日本キリスト教者の行為は、キリスト教を教え広めた、という理由で不問に付すのであろうか。枡富照子の所属している日本キリスト教団信濃町教会において、植民地朝鮮での農場経営が問題にされたふしは見当らない。

枡富照子は、日本キリスト教団の月刊新聞『心の友』の歌壇選者となっている。また、一九六〇年九月にキリスト教視聴覚センターで「心の友――聖書と私」、翌年八月に「お早よう朝の訪問――生活のしおり」を放送している。

一九六三年二月三日の日記には、「教会のK氏より「長老がよいか、名誉長老にしようか、望むがまま」との事」と書かれている。

Ⅳ

いまだなほパスポートの前にたじろげり外國となりしふるさとの土

第六歌集『郷愁』（一九六四年十二月、白玉書房刊）所収、「月鳳里懐古」八十五首のうち、第六首めの作。一九六四年の作である。この集には、一九六一年から六四年までの短歌三百七十六首がおさめられて

いる。枡富照子は七十六歳である。最後の歌集となった。

一九六四年は、枡富照子が、かつての月鳳里農場を再訪した年である。ソウル在住の歌人孫戸妍の尽力で、韓国キリスト放送局からの招聘というかたちで実現したのである。

孫戸妍は、日本留学時代「鴻嬉寮」の寮生であった。枡富照子は、寮に出向いて短歌の指導をした。それを機に、孫戸妍は短歌をつくりはじめ、枡富照子に師事した。歌集に『戸妍歌集』（一九四四年十二月、ソウル・進明高等女學校刊）、『無窮花』（一九五八年四月、新星書房刊）がある。ちなみに、孫戸妍は、一九九八年一月十四日、宮中「歌会始の儀」に陪席者として招待を受け、参席している。

枡富照子は、一九六四年五月二十五日に羽田を発ってソウルに向い、六月五日に月鳳里を再訪。六月九日に帰国した。

この集の構成は、月鳳里再訪をうたった作品が中心になっている。それらをめぐる一連の作品の題名と作品数は、つぎの通りである。

「月鳳里懐古」八十五首、「郷愁」十二首、「李王妃に伴われて」四首、「孫戸妍の家にて」四首、「月鳳里行き」二十一首、「帰國」四首。

目次の冒頭は「月鳳里懐古」である。そして「帰國」は最後におかれている。「月鳳里懐古」には、掲出したうたの他に、つぎのような諸作がある。

吉野より移し植ゑつる櫻花つらなり咲くかあるじなくとも

韓國の月鳳里の邸も年毎に待ち居けむものをかくて久しき

整へしパスポート手に見え渡る全北平野の稲穂のさかり

全北の地平線に向ひ立つわが胸を占む夫よりの遺業

みことばは火なり楯なりと語りたりし月鳳里の講壇たちくるものか

第一首の結句にみられるように、当時においてもなお、枡富照子の「あるじ」意識は変わっていないのである。和服姿でソウル行きの飛行機に乗ったのも、そのあらわれではないだろうか。石井武子の「母の病床日誌」（『母　枡富照子』所収）によると、この日のために用意された着物は「くすんだ藤色の地に流れと落葉を白でそめぬいたすそ模様の訪問着」であったという。

孫戸妍は「枡富照子先生訪韓記」（『母　枡富照子』所収）のなかで「和装姿がタラップの頂上に現われた時、出迎者たちの顔は蒼ざめた」と書いている。朴正熙政権下、韓日協定妥結反対のデモが行われていたときである。民衆の投石を心配したという。ソウルに着いてまもなく、枡富照子は洋服を誂えている。

月鳳里を再訪した際、枡富照子は、孫戸妍の母親のチマ・チョゴリを着た。かつての農場に足を踏み入れたときの様子は、「月鳳里行き」において、つぎのようにうたわれている。

戒厳令下身を韓服にかためつつ月鳳里、月鳳里とひた走りゆく
ありし日を物語りくるる櫻並木かくて堪へ來と泪さそはる
二まきにあまる楊柳に迎へられ月鳳里に來し命かなしも
門前に立てるわれらをいぶかしみいで來し子らのまみ光りつつ
ありし日の夫の姿を見るものか郷愁しきり月鳳里に來て
つたなくも神の言葉を傳へたる月鳳里教會郷愁しきり
亡き人の魂背負ひ來し思ひしてこのさみどりの稲田をすぐる

枡富照子自身は、六月五日の日記のなかで、つぎのように書いている。

「月鳳里の大きい榎の木もそのまま、門前の柳、邸内の桜の木三本大幹となる、石の門もそのまま。家

は学校になっていて、子供達の出入りあり。見はるかす水田、田植終りし処あり、水みてるところあり、水田の先の地平線そのまま。

金堤、邑内の邸大きく立派にそのまま、玄関、米庫、事務所、そのままなれど……。」

孫戸妍は、前掲の文のなかで、このときの枡富照子の言動を、つぎのように伝えている。

「農場の大部分は学校になっていた。――略――橋の前の枝垂れ柳、老いた桜大木、みな覚えがある。先生はおなつかしそうに両手をひろげて幹を抱いてみる。――略――終始無言のまま、潤んだ眼で佇んでおられた先生は、低く一言「安左衛門バカ」と洩らされた。」

枡富照子は、六月九日の日記に、この旅の感想を「多くの方々の御厚意と共に、日本へのよい土産となり、教えられ励まされ、感謝であった。」とだけ記している。心の内は明かしていない。枡富照子にとって月鳳里再訪は、どのような意味を持っていたのであろうか。

孫戸妍は、前掲の文のなかで「身の危険」をも覚悟の上で「訪韓を決意させた悲願」について、つぎのように推察している。

「マッカーサー司令官の指令による、海外に所有していた日本人の土地の、敵国資産として相手国政府への帰属化は、先生にとって、青天の霹靂だったと思う。――略――先生は、もどかしさに現地に馳せ来て、腑に落ちぬ点をご自分の目でたしかめ、ご自分の耳を通して直接実情を把握したかったのであろう。」

石井武子も、そのあたりの事情を「母への追想」のなかで、つぎのように書いている。

「母は戦後韓国に渡るまで、長い間の母の心の支えだった韓国の広大な土地や倉庫、教会や学校、そして財産が戦後無に帰したことを本当に解ろうとしなかった。否解りたくなかったのである。――略――

韓国行きの目的の第一は、夫が生涯をささげ心血を注いだ彼の地の仕事と土地との戦後の状態を見、そ

れにたずさわった人々に会って、自分の今後の方針をはっきりさせたいと思ったのだろう。あれだけのものがあったのだから、韓国政府に陳情すれば僅かでも返ってくるのではないか？との望みを捨て切れなかったようであった。

しかしすべてが本当に無に帰したと、はっきり自覚し涙を流してから、母の気持ちがすっかり変わって来た。」

同じく石井武子は「カンオケ」（『母　枡富照子』所収）のなかで、月鳳里再訪後の枡富照子は「韓国にわずかに頼むものがあったのも失い、言葉には出さなかったが、精神的打撃は大きかったことと思う。だんだん本を読むことも和歌を作ることも少なくなった。――略――韓国行きのあと歌集『郷愁』を出版してからは、一層意慾がなくなって来た。」と書いている。

月鳳里再訪後に刊行された歌集の命名が、『郷愁』というのも注目すべきことである。枡富照子の心のなかにおいては、月鳳里農場が故郷でありつづけた証左ではないだろうか。枡富照子の作歌活動が、『月鳳里の歌』から始まり、『郷愁』で終わっていることも、きわめて印象的なことに思える。枡富照子の短歌の主要なテーマが、植民地朝鮮における月鳳里農場への強い執着と強い未練とにあったことを、まざまざと示しているのである。

佐々木信綱は、枡富照子の第一歌集から第五歌集までの五つの歌集に序文を寄せている。そのうち、枡富安左衛門の農場経営にふれているくだりを紹介しておきたい。

「基督の愛に依つて、日韓合併の實を野にあつてなすことを自らの使命とし、先づ教育の必要を感ずると共に、村人が向學の志の乏しきを悲しみ、今日の小學校なる普通學校と、中學校なる高等普通學校を興し、理想の村とすべく、あらゆる困難勞苦を積まれた。――略――小作の人々が、神の愛に於いて内鮮

融和するやうにと、教會を建てて、日夜心血をそそがれた。」（一九四一年『月鳳里の歌』「序」）

「夫君は、キリスト教を厚く信仰し、國運の進展にともなつて、神の樂土を建設しようと志された。それが韓國でも地味の最も良いところに數へられる全羅北道、月鳳里農場の經營である。」（一九五八年『樫の木のもと』「序」）

枡富安左衛門が朝鮮で農場経営に着手したのは一九〇六年である。一九一〇年の「韓日併合」に先立つ四年前から、すでに植民地政策の先鞭をつけていたところに、枡富安左衛門の農場経営を判断する基軸が据えられなければならない。佐々木信綱は、一九四一年の時点では「日韓合併の實」をあげることに努めた、と評価している。しかし、一九五八年の時点では植民地政策への荷担を隠し、「神の樂土を建設」しようとした、と美化している。

キリスト教者達は、枡富安左衛門の農場経営を、どのようにみていたのであろうか。

枡富照子は「ありし日の事ども」（『枡富安左衛門追想錄』所収）のなかで、植村正久にふれて「大正元年九月には金堤驛が出來て驛前に出張所と倉庫が出來ました。この年であつたか、植村正久先生が傳道旅行の途次、群山に立寄られ、應援されました。」と書いている。また、鎌倉の枡富家に寄ったときには、枡富安左衛門に対しては「たゞ仕事のこと計り」をたずねたという。そして、農場の稲を取り寄せさせて「富士見町教會でなされる新嘗祭禮拝」に用いたという。

斎藤芳子の「恩師の思い出」（『母　枡富照子』所収）によると、一九五五年の暮、キリスト教者のお茶の先生を捜していたところ、知人から枡富照子を紹介されたという。そのことを所属している富士見町教会の「島村」牧師に伝えた際、枡富照子が「「朝鮮の王者」といわれ大変な土地を持たれ」ていたことを知らされ「『月鳳里の歌』という先生の歌集を見せていただいて感激を新たにいたしました。」と書いてい

る。

信濃町教会に所属していた石井千秋は「二人の安左衛門の出会い」（『三田評論』一九七二年七月号）のなかで、義父の朝鮮進出について、つぎのように書いている。

「韓国民に対する同情禁ずる能わず、終に門司にあった広大な土地を次ぎ次ぎに売却して、韓国の全羅北道の農地改革に生涯を捧げる決意をしたのである。」

枡富照子は一九五八年の時点においても、「朝鮮月鳳里に文化と信仰のために召命をうけて、夫と共に農事經營を始めた。」（『樫の木のもと』「あとがき」）と言い切っている。

枡富照子は、一九四五年八月十五日以後も植民者意識を持ちつづけた。日本帝国主義の植民地政策に荷担した事実を認めようとはしなかった。朝鮮人のためによいことをした、と臆面もなく主張しつづけたのである。その意味において、枡富照子は、植民地朝鮮から戻った日本の文学者・植民地朝鮮から戻った日本のキリスト教者の一典型である。

枡富照子の六つの歌集において「月鳳里（げつぽうり）」とルビが付されている。このルビはまちがっている。「月鳳里（ウォルボンリ）」とルビを付すべきであることを、最後に付け加えておきたい。